

戦中「学級日誌」講演会と展示会の開催

吉村 文成

瀬田国民学校5年智組（担任・西川綾子教諭）の女生徒たちが太平洋戦争末期の昭和19年4月から20年3月までの1年間にわたって描き続けた「学級日誌」についての講演会を開催、合わせて、これらの日誌全191枚の展示会を開催した（いずれも龍谷大学国際文化学部主催、里山ORCなど後援）。瀬田国民学校は、龍谷大学瀬田学舎にほど近いところにある瀬田小学校の戦争当時の名称である。

講演会は、2008年6月17日（火）午後3時15分から2時間、瀬田学舎ではもっとも広い4号館209号室で開催した。

この学級日誌の筆者である内田（旧姓・八幡）喜代子さん、奥村早智子さん、本郷豊子さん、吉田（旧姓・本郷）清子さん＝いずれも75歳＝が、パワーポイントで映し出される日誌について背景説明を行い、さらに担任だった西川綾子さん（91）が、日誌作りを思い立った理由や保存してきた経緯などについて語った。

そのほか、今回、学級日誌を“再発見”する役割を果たした南大萱資料室の松田庄司室長と南大萱「戦争の記憶展」委員会の国松巖太郎委員長にも、そうした事情などについて話していただいた。

日誌の朗読は、NHK天津放送局の藤村周子キャスターに特別に担当していただいた。また、国際文化学部1回生の熊野文緒、焼山欣子、沢口和子、榊恵理子、社会学部3回生の松浦宏子の5人も、NHK天津放送局の石踊昌一チーフアナウンサーの指導を受け、一部を担当した。

聴衆には、龍谷大学の学生たちにまじって地元のお年寄り、小学生をつれた母親などの姿も見え、盛況だった。

展示会は、6月12日（木）から23日（月）まで、瀬田学舎のRECロビーおよびホー

ルの一部をお借りして開催した。ここでも、学生たちだけでなく、地元の方たちの姿が目立った。一部には、大阪、京都などから来たという方々もいた。

講演会および展覧会は、それぞれ、テレビや新聞各紙で報道され、広く関心を集めた。

こうした講演会と展覧会を企画した理由は、第一に、絵と文章の質の高さに感心したことである。

たしかに時代を反映して戦争や戦意高揚の活動が随所に取り上げられている。しかし、そこに描かれた絵の構図は驚くほど自由で、色彩は大胆だ。文章は細やかな自然観察を交え、やわらかな情感を伝えている。

あの戦争の時代、すべてに乏しく、皇民化教育が幅を利かせた抑圧の時代に、どのようにして、こんなにも自由でやわらかな情操が育てられたのか。そのなぞを探り、感動を多くの人々と共有したい、と考えた。

第二に、この日誌は歴史資料、教育素材としても第一級の価値がある、と判断したことである。まず、昭和19年4月から翌年3月までの1年分がそっくりそろっている。しかも、後で思い出して描いたものではなく、まさしく、その時代、その日に描かれたものだ。そのような資料を実際に見、その筆者の話を直接聞くことは、戦争や平和、教育、歴史などについて考える上で極めて重要だ、と考えた。

さらにいえば、日誌は、瀬田国民学校という限られた空間の記録だが、同時に、若者を戦場に送り出し、銃後を支えた、全国津々浦々の戦争体験、いわば「どこにもあった戦争」の記録でもある。その点で、広範な国民に共有されるべき資料であり、広く発表してゆきたいと考えた。

なお、日誌と講演会の際の西川綾子教諭の講演をまとめたDVDとビデオが、南大萱「戦争の記憶展」委員会の手で制作され、製造実費（1300円）で頒布している。

また、国際文化学部でも、全日誌と解説などをまとめた冊子を発行した。

解説をまとめるにあたっては、この日誌がわたしたちをひきつける理由を探ることに努めた。その結果、行きついたのは、瀬田国民学校の当時の校長である矢嶋正信氏である。矢嶋校長は、学習園（学校農園）や実習田（学校水田）の経営を通して、「土に親しむ教育」を提唱し、あの軍国主義教育の時代に「ほめる教育」を推し進めた。

西川教諭からいただいた手記には、こう記されている。

「いつも作業着を着て、堆肥を造り、各級に分けたり、草花や野菜の苗を各級に配られ、その栽培法を指導された。苗から収穫までの成長過程を記録し、作文や理科に生かす総合教育を提唱された。いつもここにこされて笑顔を絶やさず、全職員の短所より長所を認めて生かし、賞賛された。私達も生徒に長所を生かす指導を教えられた。植物にはくわしく、道端のどんな雑草の名も知っておられた。私ども教職員は、親のように校長を信頼した」(原文のまま)。

西川教諭の認識では、矢嶋校長の「土に親しむ教育」は、そのまま「命を育む教育」である。

学級日誌の背後に、このような教育があり、このような異色の教育者がいたことを知ったのは、当初予想もしていなかった意外な展開であった。矢嶋校長らの進めた教育については、里山学ORCとしてもさらに考察を続ける必要がある、と考えている。

龍谷大学と「学級日誌」との関わりは、2007年4月、「南大萱資料室」の協力を得て龍谷大学瀬田学舎で開催した展覧会「大・南大萱展」にさかのぼる。この展覧会場の一部に「戦争の記憶展」コーナーがあり、そこに、南大萱に住む吉田清子さんが持っていた学級日誌の一部24枚(写真をもとに作成)が展示されていたのである。この展覧会については、すでに冊子「南大萱という世界」(2008年3月、龍谷大学国際文化学部)でまとめた。